

平成22年5月25日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18320097
 研究課題名（和文）東アジアにおける戦争・植民地記憶の保存と表象に関する国際的総合研究
 研究課題名（英文）International general research about a save and representation of the war / the colony memory in East Asia
 研究代表者
 君塚 仁彦（KIMIZUKA YOSHIHIKO）
 東京学芸大学・教育学部・教授
 研究者番号：00242230

研究成果の概要（和文）：

本研究では、中国・台湾・韓国・ロシア（サハリン地域）・日本など東アジアを対象として、19世紀末から20世紀にかけての戦争と植民地統治をめぐる記憶がどのように収集・保存され、公開・表象されてきたのかを、ヨーロッパとの比較も含め調査研究した。東アジアにおける戦争・植民地記憶の保存と表象は、各国各地域相互の歴史認識の差異や政治状況を背景として、欧州とも異なる複雑多岐な様相を呈している。同時に、戦争や植民地支配への抑圧と抵抗の記憶、平和追求のためのモニュメントとして、東アジアにおける歴史認識の分断ではなく連帯のあり方を模索する上で重要な意義を有するものであることが明らかにされた。

研究成果の概要（英文）：

In this study, Russia, China, Taiwan, South Korea (Sakhalin region), as for East Asia and Japan, which is stored memories collected over a colonial war of the late 19th and early 20th centuries, public whether the representation has been, by comparison with Europe, including research. Representation and memory storage colonies in East Asia war, against the background of the political situation and historical understanding of the difference between each country and region are showing signs of different complexity and variety of Europe. At the same time, the memory of oppression and resistance to war and colonialism, as a monument to the pursuit of peace in East Asia in the division of historical understanding, but must have great significance in exploring the way of solidarity rather than been revealed.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
2007年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
2008年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
2009年度	3,200,000	960,000	4,160,000
年度			
総計	16,000,000	4,800,000	20,800,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：東アジア・戦争・植民地・記憶・表象・保存・博物館・戦争遺跡

1. 研究開始当初の背景

本研究開始当初、東アジア地域においては、主に日本と中国、日本と韓国との間で、近代における侵略戦争と植民地支配をめぐる歴史認識の違いが浮き彫りになりつつあり、その様相は、まさに「歴史戦争」ともいうべき状況を呈していた。日本軍「慰安婦」被害者からの事実認定要求と名誉回復、損害賠償請求などの動きがその代表例であるが、教科書問題などの例を引き合いに出すまでもなく、加害者そして被害者双方の間には、深刻な断絶が横たわっていた。そして、問題解決に向けての若干の進展はあったとはいえ、対外的に見れば、そのような状況は現在も続いていると思われる。

学術的には、東アジアにおいてこの問題を正面から見据えようとする動向が、研究開始当初以後、各分野において見られるようになってきた。本研究は、そのような政治的・社会的、そして学術的状況を背景に企画・計画されたものである。

2. 研究の目的

本研究は、中国・台湾・韓国・ロシア（沿海州地域・サハリン地域）・日本などの東アジア各地を対象として、19世紀末から20世紀にかけての戦争と植民地統治をめぐる記憶（戦争記憶・植民地記憶）がどのように収集・保存され、調査・研究され、公開・表象されてきたのか、されているのかを明らかにし、その意義を検討することを目的にした。

3. 研究の方法

本研究では、全体を4期に分けて実証的かつ比較歴史学的に調査・解明することにより、東アジアにおける戦争記憶・植民地記憶の保存と表象の歴史的意味・意義を、国際的視野から総合的に明らかにしようと試みた。

先述した東アジアにおける歴史認識をめぐる状況については、現在においても大きな改善がなされているわけではない。むしろ、市民社会の中で、自由主義史観的な見方が広がりを見せている状況さえある。東アジアにおける歴史認識をめぐる状況は、むしろ研究開始当初よりも緊張度が増している。

戦争や植民地支配の被害者が、各国において相当なスピードで減り続ける一方で、近代化を軸に植民地支配の一側面を取り上げてその先進性を高く評価したり、侵略戦争自体を美化したりという動きが、社会状況にもならず、研究状況にまで見られるようになってきている。その状況を打開し、東アジア地域で可能な限り共有しうる戦争や植民地をめぐる

歴史認識を作り上げる鍵となるのが、戦争遺跡や博物館の展示表象であり、それゆえ、本研究ではそれらを主な調査分析対象とした。

4. 研究成果

(1) 研究初年度は、各調査課題・総合的中期構想研究計画に基づき、韓国・中国・日本における戦争記憶・植民地記憶に関する現地学術調査、ならびに同テーマによる国際シンポジウム等を実施した。

2006年5月、海外在住の研究分担者との共同研究打ち合わせ会議を韓国・プサンで実施し、9月、東京学芸大学にて研究打ち合わせ会議および予備調査を行った。

同月、韓国ソウル市およびその周辺地域、韓国南部の麗水市周辺地域において、韓国における戦争記憶・植民地記憶の保存・表象の実態を明らかにするため、第1回現地学術調査を実施した。この調査では、韓国国内における博物館等の施設だけではなく、米軍軍事演習地跡、植民地時代のハンセン病療養施設等の調査を実施し、日本ではあまり知られていない史実および戦争・植民地遺跡についての調査を行うことができた。

10月、東京において戦争遺跡・植民地記憶に関する国際シンポジウム「東京の戦争遺跡」を実施、日本・中国・韓国の研究メンバーを主体とする学術研究交流を行った。国際シンポジウムでは、研究メンバー以外からの専門的知識の供与という観点から特別講演も実施し、総計12本におよぶ調査研究報告がなされた。

それらの成果を踏まえて、中国の戦争記憶・植民地記憶調査に関し、次年度研究計画を見据えて、中国東北部・延辺地域の第1回現地学術調査を、延辺大学等の協力によって実施することができた。この調査でも、これまで日本であまり紹介されていない多くの調査研究成果を得ることができた。なお本調査は、次年度計画の総合的学術調査および国際シンポジウム開催の準備段階に位置づくものであった。

日本に関しては、2007年2月、原爆被害および加害事実に関する戦争遺跡に関する現地学術調査を、広島市・呉市・竹原市およびその周辺地域で実施した。この調査では、日本における戦争記憶・植民地記憶の保存・表象の特色の一端を明らかにする重要な学術情報を得ることができた。「被爆地・広島」というイメージだけではなく、むしろ「軍都・広島」の側面で、加害の側面から広島・呉市地域を把握しなおす必要性を痛感した。

(2) 研究 2 年度目には、各調査課題・総合的中期構想研究計画に基づき、地域的には、中国東北部・ロシアおよび日本国内における戦争記憶・植民地記憶に関する現地学術調査、および国際シンポジウム等を実施した。

2007 年 8 月、中国東北部・延辺朝鮮族自治州・延吉市の国立延辺大学において「侵略と抵抗」をテーマに国際学術シンポジウムを実施し、研究代表者ならびに分担者、および現地研究者が研究報告を実施し、当該テーマに関する学術的意見交換ならびに専門的知識の供与を得ることができた。

また初年度に引き続き当該地域における第 2 回現地学術調査を延辺大学等の協力によって実施した。海外調査では、ロシア・サハリン地域における朝鮮人の戦争体験調査も実施した。同地域については、これまであまり日本側による調査がおこなわれてはこなかったが、現地調査においてはサハリン大学の協力を得ながら、これまで明らかにされてこなかった戦争遺跡なども調査することができ、その意味を確認するという多大な成果を得ることができた。サハリンにおける現地調査は、次年度以降における当該地域調査の準備段階に相当するものである。

国内における戦争記憶・植民地記憶に関する現地学術調査は、2008 年 2 月および 3 月にかけて、長崎、沖縄、高知、岡山において実施することができた。

長崎では、原爆被害と在日朝鮮人の記憶に関する調査ならびに高島炭鉱における戦争記憶についての調査を実施した。

沖縄では、沖縄線関連遺跡ならびに現地の戦争平和博物館の調査、ならびに沖縄愛楽園でのハンセン病回復者の戦争記憶についての調査を実施した。高知では草の根の平和博物館に関する調査を、岡山では邑久光明園・長島愛生園におけるハンセン病回復者の戦争記憶について調査を行った。

(3) 研究 3 年度目は、共同研究の第 3 課題である中国の戦争・植民地記憶の研究(その 3)、第 4 課題である総合的中期構想研究(3)を研究の柱に立てた、

その方向性に従い、中国・国立河北大学の国際学術シンポジウムの開催(東アジア教育文化学会主催への協力)をはじめ、上記の研究目的を達成していくための諸学術調査を実施した。

学術フィールドワーク調査は、中国吉林省長春市周辺において「満洲国」関連遺跡や博物館を調査し、河北省地域では、省内に所在する戦争遺跡・植民地支配遺跡等を調査することができた。とくに興隆県地域に残されている「万人坑」や「集団部落」跡は、これまで日本国内で知られていないものばかりで、大きな成果を得ることができた。

国際学術シンポジウムは、中国・河北大学(河北省保定市)を会場に行われ。派遣研究者 11 名(連携研究者)が参加し、「中国河北省地域の戦争・植民地記憶と遺跡」をテーマにした 10 本の研究報告が行われ、相互討議が実施された。

このような中国におけるローカルレベルも含めた現地研究者や当事者からの専門的知見の提供、あるいはオーラルヒストリーについては、これまで日本国内で認識されていなかった学術情報の収集という点からも、また、今後、研究を発展させていくための人的ネットワークの構築という意味でも、大きな意義があったと考えられる。

(4) 研究最終年にあたる本年度は、①台湾における日本植民地時代の台湾史跡の検証、とりわけ植民地時代の神社遺跡や霧社事件に関する現地学術調査および歴史資料調査、②国際比較研究の観点からポーランド・ドイツにおける戦争記憶・植民地記憶に関する現地学術調査を実施し、③東京におけるとりまとめ研究会「戦争・植民地記憶プロジェクト会議」を開催することができた。

台湾における現地調査は 2009 年 6 月に実施され、博物館・史跡整備等を通して戦争・植民地記憶の保存・公開を図るいくつかの典型例を調査した。具体的には植民地時代に建設された建築物や神社遺跡、遺物、そして台湾住民による植民地支配への抵抗運動として記憶されている霧社事件に関する遺跡・遺物などである。また歴史資料(文献)調査では、台湾大学において関連資料の調査および収集を行い、同時に、現地研究者との学術研究交流を行い、台湾における戦争・植民地遺跡の保存や記憶のあり方に関する学術情報交流を行った。

ポーランド・ドイツにおける現地学術調査は 2009 年 8 月に実施した。ホロコーストの歴史と記憶を被害・加害双方の立場から、その記憶の記録化と表象の特色的な在り方について相互検討を行い、その特質を解明することが目的であった。ポーランドでは、国立オシュフィエンチム・ビルケナウ博物館や首都ワルシャワ蜂起博物館など被害と抵抗の場の博物館化の様相を調査し、ドイツでは首都ベルリンにおけるナチス関係遺跡の保存公開に関する実地調査を行うことができ、東アジアとの比較における今後の課題等について、新たな知見を得ることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

- ① 君塚仁彦「東北アジアにおける戦争・植民地記憶の保存と表象」、『The

Divergence of Memory — The Local, National and Imperial Perspectives』 Korean Studies Institute, Pusan National University, 査読有、2009、pp.113-132

- ② 君塚仁彦「『異文化』とされる側の記憶と表象-在日朝鮮人と博物館運動」、『国立歴史民俗博物館研究報告』140、査読有、2009、pp.185-200
- ③ 王智新「日本の歴史教科書問題と中国の反応」、『日本歴史研究』、韓国日本史学会研究紀要第27輯、査読有、2008、pp.29-50 (中国語)
- ④ 君塚仁彦「在日朝鮮人ハンセン病回復者の記憶と記録」、「Quadrante クアドランテ」第9号、東京外国語大学海外事情研究所、査読有、2007、pp.501-521
- ⑤ 石純姫「前近代期の朝鮮人の移動に関する一考察-北海道における在日朝鮮人の形成過程とサハリナイヌの関係を中心に」、『苫小牧駒澤大学紀要』18号、査読無、2007、pp.145-166

[学会発表] (計4件)

- ① 君塚仁彦「東北アジア戦争・植民地遺跡、遺物ガイドブックの構想と課題」、『東アジアに対する日本の戦争の記憶』東北アジア平和ベルト国際学術大会報告論文集、東北アジア歴史財団、鹿児島城山ホテル会議場、2009.7.23
- ② 君塚仁彦「日本の戦争遺跡保存と東北アジア平和構築の課題」『International Conference for the Northeast Asian Peace Belt, 2008, Busan — Laying the Cornerstones of Peace upon the War Remains—』、韓国・釜山市スリマル国際会議場、2008.12.22-24
- ③ 又吉盛清「中国上海・東亜同文書院と沖縄」(招待講演)、中国教育史学会第11回教育史年会研究大会、中国・河北大学、2008.8
- ④ 王智新「歴史教科書問題と東アジア情勢」(招待講演)、韓国日本史学会主催「歴史問題と東アジアの平和国際学術シンポジウム」、韓国ソウル市・淑明女子大学校、2007

[図書] (計3件)

- ① 君塚仁彦「展示と世間・展示の政治性と社会性-ポーランド国立アウシュヴィッツツェンター博物館を事例に」、『博物館展示論』日本展示学会編、雄山閣出版、2010、(印刷中)
- ② 大森直樹「「満洲国」の教育政策」、『日中共同研究「満洲国」とは何だったのか』、小学館、2008、182~189頁
- ③ 君塚仁彦編著『平和概念の再検討と戦争

遺跡』、明石書店、2006、340頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

君塚 仁彦 (KIMIZUKA YOSHIHIKO)
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：00242230

(2) 研究分担者

()

研究者番号

(3) 連携研究者

又吉 盛清 (MATAYOSHI SEIKIYO)
沖縄大学・人文学部・教授
研究者番号：90389619

王 智新 (WANG XIN)

聖トマス大学・人間文化共生学部・教授
研究者番号：10265035

趙 軍 (ZHAO JUN)

千葉商科大学・商学部・教授
研究者番号：30301831

渡辺 雅之 (WATANABE MASAYUKI)

東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：30134787

石 純姫 (SUK SOON-HI)

苫小牧駒澤大学・国際文化学部・准教授
研究者番号：60337102

橋本 栄一 (HASHIMOTO EIICHI)

東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：30237929

大森 直樹 (OMORI NAOKI)

東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：50251567

近藤 健一郎 (KONDO KENICHIROU)

北海道大学大学院・教育学研究科 (研究院)・准教授
研究者番号：80291582

広瀬 義徳 (HIROSE YOSHINORI)

関西大学・文学部・准教授
研究者番号：90352822